

ロビーには売店が並ぶ。内観は現代的であることを目指した。左側の開口からは正面に三輪山を眺めることができる。



工事概要

所在地：奈良県桜井市菅中880
 敷地面積：12,118㎡
 建築主：株式会社三輪そうめん山本
 建築面積：4,213㎡
 設計者：株式会社竹中工務店
 延床面積：4,139㎡
 施工者：株式会社竹中工務店
 階数：地上2階
 竣工：昭和58年4月30日
 構造：鉄筋コンクリート造、鉄骨造

正面外観。屋根には奈良東大寺大仏殿と同じ地元産の大和瓦がのる。軒は2,250mmと深く、柔らかなむくりが優しく人を引き寄せる。



BCS
 BUILDING CONTRACTORS SOCIETY
 PRIZE-WINNING WORKS
 BCS賞受賞作品探訪記
 9

第二五回受賞作品 (一九八四年)

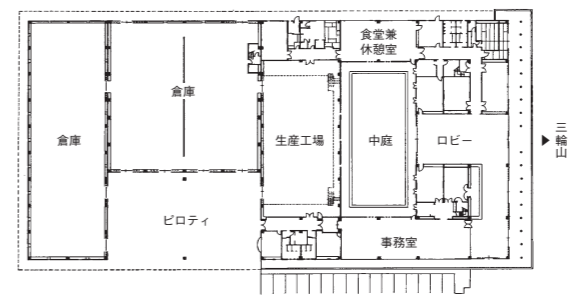
三輪そうめん山本本社

まほろばの地・奈良。この日本古代史を彩る雄大な風景の中に、三〇〇年の歴史をもつ三輪そうめん山本の本社屋は建っている。柔らかなむくりの気品のある大屋根群が、優しく人々を引きつける。

日本古代の原風景と現代建築

奈良盆地の南、桜井には古代より神宿る山として多くの人々の信仰を集めてきた「三輪山」がある。三輪山は山自体が御神体で、江戸時代まで常人は入山できず、現在でも許可がなければ入山できない。三輪そうめん山本社は、この神聖な三輪山の麓に建つ。

三輪山の麓はそうめん発祥の地でもある。寒暖差のある気候と綺麗な水がそうめんづくりに適していた。中でも三輪そうめん山本は創業一七一七年、三〇〇年近くの歴史をもつ老舗である。その本社屋建設が一九七五年に計画された。三輪そうめん山本は、先人から



平面構成は道路側より、事務所棟・工場棟・倉庫棟と並ぶ。正面玄関のある事務所棟には、売店や食堂が並ぶロビーがある。中庭を挟んで隣接する工場棟では製造が行われ、製品を倉庫棟で保管する。工場棟には、見学ができるデッキがある。

三位一体の姿勢で時間をかける

それを表現し、かつ「目立たない建物、人が寄り付きやすく親しみやすい建物」であることを求めた。そこで建物は屋根に地元産大和瓦を葺き、三輪山の稜線を模したゆるやかなむくりをもつ寄棟の大屋根が、大地に張り付くように連続するものとなった。建物の高さを低く抑え、軒は深く、屋根も程良く分節されている。安定感があり日本的で親近感がある。地域に愛され環境と一体化している。

この建物の建築現場では様々な苦労があったが、大きくは二つに



倉庫棟内部。そうめんが高く積まれている。この場所ですべて2年間ねかせ。梁は細い鉄パイプによるトラス構造。



第三期・倉庫棟増床の屋根スラブ配筋工事の風景。中空スラブとするためのボイド管が並ぶ。ボイド管は設備ダクトとしても利用している。

要約できる。一つ目は、設計開始から竣工まで一〇年もの長期にわたる計画を三位一体の姿勢で乗り越えたことである。この間に九〇回もの建築委員会が建築主、設計者、施工者の三者によって開催され、この三位一体の姿勢は終始貫かれた。設計期間は、敷地内の発掘調査の期間も含まれるが、一九七五年から三年。さらに施工は三期に分けて五年間に渡り行われた。この規模の建物の工期としては異例の長さで、建築主の情熱とこだわり、設計者・施工者の粘り強さを感じることができる。

二つ目は、倉庫・工場・事務所といった機能も要求寸法も異なる

※1「古壺新酒」は、高浜虚子が創作した造語。虚子は「俳句は容器としては古い壺(形式)に花鳥調詠という新しい酒(内容)を盛る」と主張している。

※2 反りとともに日本の伝統建築などによく用いられる形状。寺院や神社の柱に見られるような、緩やかなふくらみ。

建築主・設計者・施工者 座談会

三輪そうめん山本本社の建設当時を振り返って

三輪そうめん山本本社の建設当時に関わられていた建築主、設計者、施工者の4名の方にお集まりいただき、それぞれの立場で感じられた当時の思い出を語っていただきました。

- 【建築主】 三輪そうめん山本 社長
山本太治
Tabaru Yamamoto
- 【設計者】 元株式会社竹中工務店
狩野忠正
Tadamasa Kano
- 【施工者】 元株式会社竹中工務店
阪野 徹
Toru Sakano
- 野田久雄**
Hisao Noda



「さりげないこと」
が先代の
思い出でした(山本)

建設経緯をお聞かせ下さい。
山本 この建物が計画されたのは、私がまだ入社して間もない頃でしたので、直接の建築主は先代の山本太一です。メンテナンスは私ですが(笑)。
当時は、百貨店の贈答品としてそうめんが上り調子でした。もともと近くの別の場所に本社があったのですが、新しく現在の場所に本社屋を建てることになりました。建設には長い時間がかかりました。設計期間には発掘調査の時間も含まれていま

すが、設計に三年、工事には五年費やしました。先代がとてもこだわりをもってつくったものです。建築主、設計者、施工者で行う建築委員会は、九〇回を数えたと思います。
阪野 そうですね。八八回までは覚えているのですが(笑)。
狩野 私は設計者ですが、途中から誰が設計しているか分からなくなるんです。そのくらい、三者が渾然一体となっていたということができると思います。
野田 やはりそれは、先代の熱意と情熱だったと思います。先代は穏やかな方でしたが一言一言が重いですね。大変建築を勉強されていた。我々はそれをどのように具体化するか、とこ

とん考えました。
山本 先代は京都工芸繊維大学の卒業なので芸術には興味がありました。またこの建物を設計する前に、当社の有家工場(九州)を建築家の青木繁さんと共につくっています。青木繁さん
が置かれ、来客を迎えるとともに、能など様々な催しに対応できるようになっていた。また敷地内には、地下に八〇センチもの雨水貯留槽が設けられ、雨水が隣接の田畑へ流出しないように配慮されている。細やかなところ配りは、社員や来客など建物を利用する様々な人々にも浸透し、建物はとても大切に使われ続けているという。
現在でも三位一体の姿勢は維持されている。建物はその連帯感によって長期に渡り細やかな維持管理がなされており、竣工後約三〇年が経過してもなお、脈々と当初の思想が引き継がれ生きています。



深い底のデザインが
現代の日本建築にも
必要だと感じた(狩野)

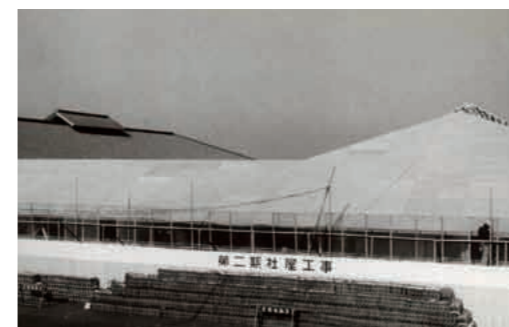
にはこの建物の建築顧問をお願いしていましたが、この頃から建築に対する面白さを発見したのだと思います。先代は、自分の脚で沢山の建造物を見て歩いていました。そのイメージが建物に反映されていると思います。
建物のテーマやご苦労された点をお聞かせ下さい。
山本 先代は「さりげなくあること」ということを良く言っていました。それは周辺の歴史的な風景やそうめんを生み出してくれる自然に敬意を払って



南側から屋根の重なりを見る。奥に見える三輪山の稜線を模して屋根にむくりをつけた。外壁の色は三輪の大地の色を表現している。(写真：村井 修)

建物を納まりよく「蔵」のイメージで統一していることである。このため現場は、三つの工期で異なる構造形式を用い工夫している。例えば第一期の倉庫棟は大スパンと厳密な温湿度管理が求められた。そこで細い鉄パイプによるトラス構造を採用し、梁が空気の対流を妨げることを少なくした。また第三期に増床した倉庫部分では、屋上に庭をつくることになった。そこで屋根スラブの中にポイド管を

埋め込む無梁版構造とし、さらにスラブの中のポイド管を空調のダクトとして利用することで、天井からダクトも消した。さりげないが大変な工夫と苦労がうかがえる。
三輪山の稜線を模した美しい屋根
各棟には三輪山の稜線を模した、ゆるやかなむくりをもつ四寸勾配の美しい大屋根が架かっている。このむくりは梁の上に溝形鋼の垂木をのせ、鉄骨母屋の自然に曲がる力を利用して表現したという。
当初、屋根材は大スパンを架構するため、折板などの金属屋根が検討されていた。しかし打合せを重ねるうちに、三輪山の麓という風土に合う屋根は、「大和瓦」しかありえないことで意見が一致した。幸いにも同時期に奈良東大寺の改修工事が行われており、新設された瓦工場が現場近くにあった。この瓦工場に東大寺の瓦製作の完了後、瓦をつくってもらうことになった。このため屋根には、東大寺と同様の地元産の大和瓦が用いられた。大和瓦は一般的な瓦よりも



第二期・事務所棟の屋根瓦下地工事。150mmの溝型鋼でつけたむくりの上に、防火のため下地をセンチューボードで張っている。瓦は乾式工法で葺いた。



中庭。樋はなく瓦から直接落ちる水のすだれを風情として演出している。雨落ち部分は幅400mmの砂利敷きで内部に浸透管を設け雨水を処理している。

一回り大きく耐寒性にも優れているため、瓦棧に釘打ちの乾式工法で、葺き土を用いずに葺いている。さらに大屋根には、六寸勾配の越屋根がのっている。むくりもやや大きくすることで大屋根に変化を与えスカイラインをやわらげた。
隅々まで浸透した「ころ配り」
外壁の色は三輪の大地の色を表現しているという。これは地域と一体となることを意図しており、このような地域や周辺環境へのころ配りは、随所に見られる。例えば中庭には、三輪そうめんの原型となる糸巻きを象徴化した彫刻

が置かれ、来客を迎えるとともに、能など様々な催しに対応できるようになっていた。また敷地内には、地下に八〇センチもの雨水貯留槽が設けられ、雨水が隣接の田畑へ流出しないように配慮されている。細やかなところ配りは、社員や来客など建物を利用する様々な人々にも浸透し、建物はとても大切に使われ続けているという。
現在でも三位一体の姿勢は維持されている。建物はその連帯感によって長期に渡り細やかな維持管理がなされており、竣工後約三〇年が経過してもなお、脈々と当初の思想が引き継がれ生きています。

たからだと思いますが、昔からそこに在るような親しみ易い建物を目指しました。ですから屋根のかたちは三輪山の稜線を模していますし、むくりは人に来てもらうためのイメージです。

野田 しかし、屋根にむくりをつけるのに大変苦労しました(笑)。細い軽量鉄骨の自然の重みでむくりをつけるのですが、同じに曲がってくれない。軒先を揃えるのに大変苦労しました。

場・事務所と異なる機能が一つのイメージの屋根の下に収まっていることだと思っています。各種で構造も異なりますし、要求される寸法も異なります。それを地元産の大和瓦の大屋根で統合している。最初、倉庫に瓦屋根を葺くと聞いたとき正直びっくりしました(笑)。

人とのつながりが

後世に誇れる

建築を生んだ(阪野)



についてお聞かせ下さい。

野田 この建物は多くの人の力で出来ていると思います。それは先代の熱意と自然なふるまいがあつてこそだと思っています。先代は温厚な方で懐が深く、阿吽の呼吸で仕事が進んでいくような感覚でした。温かい気持ちで仕事ができ、一体感のある幸せな現場でした。関係者の皆様にご感謝しております。人生勉強にもなりました。

阿吽の呼吸で仕事
できた温かく
懐の深い現場(野田)



もなりました。

狩野 私はこの建物を担当する前は、百貨店ばかりを設計していました。ですから、最初は瓦屋根の大屋根は日本的すぎる、もっとモダンであるべきだと思いました。しかし完成してみるとやはり、瓦や深い庇が日本の建築には必要だと感じました。

この建物はこれ以降の私の設計の転換点になりました。

阪野 現在でも建物を大切に使うてくださっていることに感動いたします。メンテナンスも頻繁に行われています。そういっ

たところ配りが、社員の皆さんにも浸透している。この建物は私にとって生涯最高の作品です。

山本 私達はやはり「気持ち」を大切にしたい。贈る人の気持ち、贈られる人の気持ちを大切にしたいと思っています。それには、古いものを大切にしながら、新しいことに挑んでいく「古壺新酒」の精神が重要だと考えております。この伝統的で美しい建物を大切にしながら、これからは新しい商品を世に送り出したいと思っております。

「蔵」が一番重要なのです。

阪野 そうですね、そうめんには湿気が大敵なので、倉庫は二重壁にして自然換気を行っていきます。また大屋根には越屋根を設け換気口としています。温湿度管理には大変気を配りました。

山本 その辺り先代は、日本家のイメージを残したかったのだと思います。

―建物に関する感想や、今後